ガザ 負傷した子どもたちへのリハビリ支援とその成果

ガザ地区では、2014年の戦争により負傷した子どもや青少年250人を訪問して診療しています。
手術等の後、十分で適切なアフターケアやリハビリがされていないケースが多いためです。
医師・理学療法士・看護師・ソーシャルワーカーのチームが各家庭を訪問して、
アフターケアやリハビリテーションなどの医療サービスを提供しています。

爆撃による骨折、爆破物の破片による負傷、その結果の諸症状が見られました（下の円グラフ）。

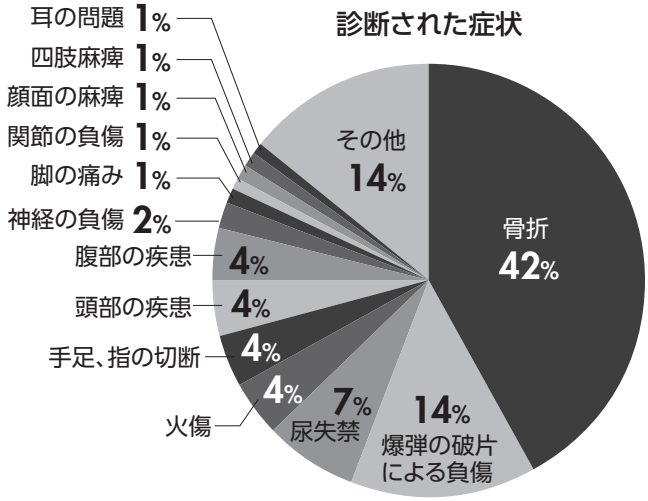
患者一人一人について家族と相談しながら治療・リハビリのプランを策定します。医師は子どもの健康状態を管理し、既往症がある場合は悪化を防ぐためのアドバイスをし、経過観察をしています。医師の診断と指示により理学療法士が運動機能回復のためのリハビリを実施。筋力の回復、関節の可動範囲の回復、歩行のバランス補正など様々な方法を取り入れました。

理学療法の対象208人は、昨年末までに延べ4,028回の個別訪問による理学療法セッションを受け、101人が歩行補助靴、手首などの関節固定器、松葉づえ、吸入器などの補助器具を提供されました。

その結果、250人中238人（95.2%）の症状に改善が見られました。うち95人は日常生活に差支えが無いところまで回復し治療を終了しました。また少なくとも5人が学校に復帰しました。112人は今後も治療を必要としています。治療が開始されたのは負傷から9か月以上経過していて、治療期間は最大でも6か月半という期間であるため治療の効果はまだ限定的です。思春期の青少年では、後遺症に対する心理的なダメージが大きく、今後は心理専門家の派遣も予定しています。

リハビリの成果を測るために「徒手筋力検査」という国際指標に基づく5段評価方法を使い、筋力の回復度合いを計測しました。筋力を測定した129人では、平均で1.5ポイントの改善が見られました。また、最大で3ポイントの改善が6人いて、継続した治療が効果をあげていることが分かります。

リハビリ補助器具の提供も当初予定より数が大きく減りました。これは、予想よりも子どもたちの回復が早く進み器具を必要としなくなったためです。なお、戦争とその後の厳しい状況で症状が悪化していた、脳性まひや慢性呼吸疾患の子どもたち60人以上についても、訪問診療をしています。



ZA 洪水被災者への支援

1月末、ガザは荒天による強風と冷たい雨、アラレに見舞われ、洪水のため各地で浸水により避難する世帯が多く出るなど、緊急支援の必要が高まりました。

避難を余儀なくされた世帯は、ガザ北部で220世帯、ガザ中部で250世帯、ハンユニスでは800世帯に上りました。特にハンユニスでは、カララやホザなどの2014年の戦争で被害が大きかった地域や、家を失った人たちの住むコンテナ村に集中しました。電気が無いために下水処理システムが機能していないことも被害を大きくしています。3人の子どもの死者も出ました。

また農業被害も大きく、特に養鶏場とビニールハウスに被害が出ました。

2016年に入り、イスラエルからガザに向けたガスの供給が厳しく制限され、電力も慢性的に不足しており、寒さが厳しい日常生活に大きな影響が出ています。

（洪水写真は地元メディアより）

緊急事態が宣言されたなか、当会は、特に緊急性の高いハンユニスの222世帯に対して、3日かけて毛布、ビニールシート、懐中電灯の配布をしました。

いまだに9万人が廃墟やコンテナに住む

生計への支援

ガザ南部のハンユニスは地中海に面していて、たくさんの零細な漁師が生活しています。封鎖によって、海岸から3海里までしかガザの漁師は出られませんが、サバ、イカ、エビなどを取って細々と生計を立てています。戦争の影響で、漁具を失ったり被害を受けた漁民への支援を行いました。

また、戦争で家族を亡くしたり、家と職を失った人たちが少しでも自立できるように、庭のある家族には、家庭菜園ができるような支援、また女性の内職も支援しています。こうした活動には地元の若者が中心になっていて、ニーズを調査し、時には作業の手伝いもしています。